

## 私の人生を変えた言葉

医師になって7年目。医学博士、東大助手であった1969年。1月に安田講堂落城、大学紛争はピークへ。1ドル360円、ドルの持ち出し制限が700ドルになった年。7月、アポロ11号の人類初の月面着陸をテレビで見た2日後、羽田を出発。初めての外国、アメリカに2年の予定で。

Hawaii経由でPhiladelphia到着。Pennsylvania大学へボスに会いに行く。細胞シグナリングでのカルシウムの重要性を提唱する斯界のリーダー。初対面で彼にいわれた3つの言葉。

1. 私の仕事を手伝いに来たのではない。この2年は、あなたが独立した研究者になるためだ。自分がやりたいテーマで研究すればよい。
2. 私たちは対等だから、私との議論でも自分の意見は遠慮なくいうこと。
3. 英語が理解できないことも多いだろう。でも、わからないときはすぐ聞きなおせ。ニコニコして理解したフリはいけない。

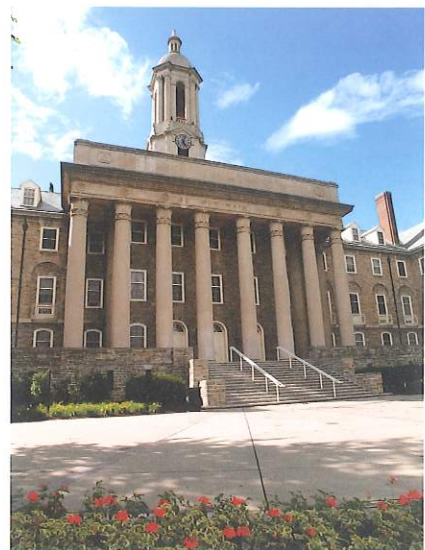
これは衝撃的だった。ボスにテーマを与えられると思っていたから、戸惑った。困った。私は本格的な生化学研究を習ったわけではないし、周りはPh.D.のポスドクばかり。

「よーし、それならば」と半ばやけくそで、2ヶ月毎日図書館へ通い、色々テストし、失敗しながら実験を始めた。1年目は本当に大変だった。初めての実験手技はPh.D.に教えてもらう。ボスはサバティカルでイギリスに。「ダメなやつ」と思われると口も利いてくれないボスと評判。研究の意味と実験結果が出ていないと話にならない。

2年目になると面白いデータが出始めた。毎日のように、ボスは議論をしに来る。これはつらいが、本当に楽しい。

ボスは、若い研究者に自分を見つける機会を与え、テストしていたのだ。決して自分の研究の手伝いなどとは考えていなかったのだ。

この初対面の経験は、私の中に眠っていた「反発的」性格にも合っていたのか、以来15年アメリカに居続けた私の芯に流れていたのは、この衝撃から目覚めたときの私だと思う。それが私の若い人たちへの対応の根底にあると感じることがある。私の役割は、若い人たちに自分を見つける機会を作ることだ、と。



黒川 清 (くろがわ きよし)

政策研究大学院大学 教授

1962年東京大学医学部卒業、68年同大医学部第1内科助手。69年ペンシルバニア大学医学部生化学助手、73年UCLA医学部内科助教授、74年南カリフォルニア大学医学部内科準教授、77年UCLA医学部内科準教授、79年同教授。83年東京大学医学部第4内科助教授、88年同大医学部第1内科教授。96年東海大学教授・医学部長、同大学総合医学研究所長など歴任。2003～06年日本学術会議会長、内閣府総合科学技術会議議員。06年より08年まで内閣特別顧問を務める。06年より政策研究大学院大学教授。Health and Global Policy Institute代表理事。IMPACT Japan代表理事。

(撮影:佐久間哲男)